私市円山古墳と以久田野古墳群

—大型古墳をささえた中小古墳—

石　井　清　司

1　はじめに

1987年、丹波地方の古墳のイメージを一新した私市円山古墳の発掘調査が行われた。

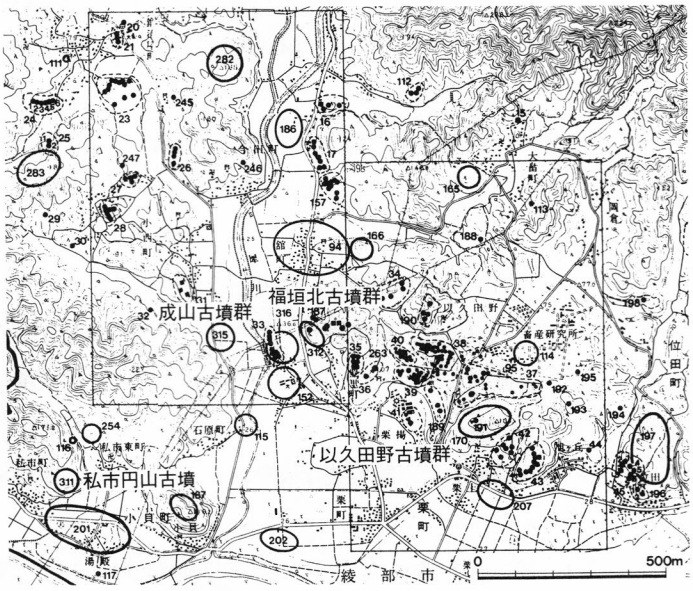
私市円山古墳は、直径71mを測る円墳で、外部施設は三段築成、埴輪列と葺石をもち、墳頂部には3基の埋葬施設がある。この3基の埋葬施設からは冑・短甲・頸甲・胡籙・鏡など豊富な副葬品が出土した。この古墳は、由良川を見下ろす位置にあり、綾部・福知山盆地を統括した畿内色の強い首長墓と考えられている。

この注目される古墳の調査が1987年と1988年の2ヶ年にわたって行われている時期に、綾部では、同じ近畿自動車道敦賀線に係わる調査として、福垣北古墳群の発掘調査が行われていた。

福垣北古墳群は、後述するように私市円山古墳と相前後した時期に築かれた小規模古墳であり、大型古墳を支えた集団の一端を窺い知る上でも良好な資料と思われるため、ここに紹介し、検討を加えたい。

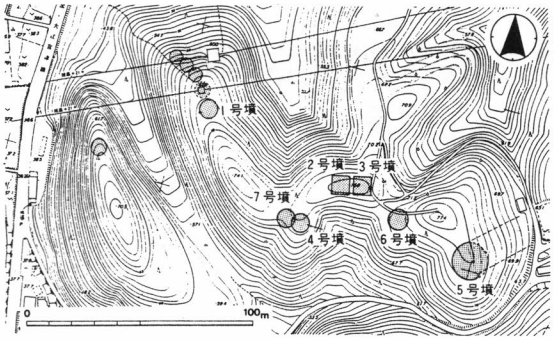
2　福垣北古墳群の概要

福垣北古墳群は、総数約120基を数え、綾部でも有数の古墳が集中する以久田野古墳群の西端に位置する。調査された7基の古墳は[1]



第1図　私市円山古墳と周辺の古墳群

311．私市円山古墳　315．成山古墳群　187．福垣北古墳群
36．殿山1号墳　39．以久田野78号墳　41．沢3号墳



第２図　福垣北古墳群分布図

一覧表のとおり、一辺あるいは直径20m未満の方墳あるいは円墳で、埋葬施設は５号墳の割竹形木棺を除き、組合式木棺である。

埋葬施設内からの副葬品としては、鉄剣・鉄斧・鉄鏃などの鉄製品を副葬するもの(１・２・３・６号墳)と玉類(周辺第１埋葬施設)、玉類と小形仿製鏡(周辺第４埋葬施設)を副葬するものがあり、中央の埋葬施設には鉄器(武器)を、周辺埋葬施設には装飾品を副葬する傾向にある。また、確認した埋葬施設では、棺の上面に須恵器・土師器などの土器類が出土する例が多い。

土器は、意図的に破砕し、墓壙上面にその土器をバラまいたもの(２・３号墳中心埋葬施設)、完形のものを正位の状態で墓壙の上面に置いたもの(周辺第１・第４埋葬施設・６号墳)がある。

埴輪は、４・７号墳の２基の古墳から10個体にも満たない数量で、破片となって出土した。この２基の古墳は、４号墳を切って７号墳が築かれている。

これらの土器と埴輪から各古墳の築造時期を検討してみる。

６号墳の墳丘攪乱層から出土した須恵器高杯蓋を６号墳に伴うものと考えれば、TK73型式[2]の須恵器に近似する。

３号墳の中心埋葬施設から出土した壺・無蓋高杯は、TK216～TK208型式と思われる。また周辺第１・第４埋葬施設から出土した甕は、中心埋葬施設の土器より若干新しくなる傾向にある。

４号墳と７号墳は切り合い関係により、４号墳が７号墳に先行することは先述したが、７号墳の埴輪をみるとタガの断面が卜形を呈し、外面調整がB種ヨコハケのものと、タガが若干鈍く、不徹底なヨコハケ調整を施すものがあり、川西編年のⅣ期[3]でも後半の時期の埴輪が含まれている。

１号墳の墳丘裾部から須恵器甕体部片が出土しており、埋葬施設からの鉄鏃とあわせ６世紀代とも考えられている。

５号墳は、副葬品を含まないが、長軸6.2m×短軸2.15mの墓壙内に割竹形木棺(長さ4.5m)が納められていたことから、６号墳に先行する時期の５世紀前半代の古墳と思われる。

第1表　福垣北古墳群一覧表

名　称	外形・規模	埋葬施設	出土遺物
1号墳	円墳 10×8.5m	木棺，形態不明 墓壙3.7×1.4m	墓壙：鉄鏃・鉄斧・鉄鎌 墳丘：須恵器片
2号墳	方墳 15×17m	組合式木棺2.6×0.5m 墓壙3.9×1.6m	棺内：鉄鏃13・剣1・刀 棺上：土師器 墓壙：鉄斧 墳丘：須恵器樽形甕
2号墳周辺第1埋葬施設	2号墳の北斜面	組合式木棺，規模不明 墓壙3.8×1.2m	棺内：勾玉1・小玉300以上 棺上：須恵器甕
2号墳周辺第2埋葬施設	2号墳の北西斜面	主体部かどうか不明	なし
2号墳周辺第3埋葬施設	2号墳の西側斜面	主体部かどうか不明	なし
2号墳周辺第4埋葬施設	2号墳の南側斜面	組合式木棺2.3×0.5m 墓壙3.7×1.2m	棺内：小型仿製鏡・瑪瑙製勾玉3・碧玉製管玉・ガラス小玉 棺上：須恵器甕・土師器
3号墳	方墳 18×16m	組合式木棺2.3×0.8m 墓壙4.0×1.5m	棺内：鉄器片 棺上：須恵器壺(あるいは甕)
4号墳	円墳 径11m 周溝	不明	周溝：円筒埴輪
5号墳	円墳 径20m 周溝	割竹形木棺4.5×0.5m 墓壙6.2×2.2m	なし
6号墳	不明	木棺3.0×0.8m 墓壙3.7×1.7m	墓壙：刀・鉄鏃 墓壙上面：土師器片 墳丘：鉄鎌・須恵器高杯蓋
6号墳周辺土壙		土師棺か 楕円形0.7×0. 5m	土師器壺片
7号墳	円墳 12×10m 周溝	不明	周溝：埴輪

以上のことから調査した7基の古墳は、

5号墳→6号墳→2・3号墳→周辺第1・第4主体

└→4号墳→7号墳→1号墳

という築造順位が考えられ、丘陵の東側から順次古墳が築造されている。

そして私市円山古墳にⅣ期の埴輪がめぐり、豊富な副葬品からみて5世紀中頃と考えられることから、福垣北2・3号墳を前後する時期に私市円山古墳が築造されている。

3　以久田野古墳群の概要

福垣北古墳群が、総数120基以上を数える以久田野古墳群の西端にあたり、以久田野古墳群の一支群であることは前述した。

以久田野古墳群は、福垣北古墳群と同様の、径10～20mの小円墳と5基の前方後円墳と径20mを越す数基の円墳で構成されている。5基の前方後円墳を含めた以久田野古墳群の変遷については、これまで諸氏が論述されている[4]。すなわち、沢3号墳は、全長46mを測

る前方後円墳で、後円部の盗掘穴から、頸甲・三環鈴・f字形鏡板・鉄斧等が出土しており、三環鈴の形態などから5世紀後半でも中頃に近い時期と考えられている。

また、沢3号墳を見下ろす位置にある殿山1号墳は、全長47mを測る前方後円墳であり、発掘調査はなされていないが、葺石・埴輪等の外部施設が認められず、墳形・立地等を考え合わせ、沢3号墳に先行する前方後円墳と思われる。

以久田野78号墳は、全長約38mを測る前方後円墳であり、くびれ部で採集した円筒埴輪の特徴から川西編年のV期に相当し、沢3号墳に後出する前方後円墳である。

この3基の前方後円墳と福垣北古墳群の調査成果を比較すると以下のようになる。

殿山1号墳――――→沢3号墳→　――→以久田野78号墳
‖　　‖　　‖
福垣北5号墳→6号墳→2・3号墳→4号墳→7号墳→1号墳

4　私市円山古墳と以久田野古墳

私市円山古墳の築造されている時期に、福垣北古墳を含めた以久田野古墳群が築造されていることは前述した。古墳を比較すると、被葬者の性格がより明瞭になると思われる。

私市円山古墳[5]は、全長71m(円丘部直径71m/造り出し部の長さ10m)、高さ10mを測り、墳丘は、三段築成で、葺石・埴輪列という外部施設をもつ。一方、福垣北2・3号墳は、丘陵を削り出し、わずかに盛土をおこなった一辺15～18mの方形墳で、中心埋葬施設のほか、墳丘斜面にも平坦面をつくり、埋葬施設(周辺第1・4埋葬施設)を築いている。

埋葬施設からの副葬品は、私市円山古墳が短甲・冑・鏡などの豊富な副葬品であるのに対し、福垣北2・3号墳は、わずかの鉄器・玉類・小型仿製鏡である。

私市円山古墳については、外部施設・副葬品の豊富さから考え、前方後円墳という墳丘形態ではないが、「きわめて畿内的で、当地域において全く異質な首長墓[6]」と考えられ、ここでは、“畿内型古墳”と仮称しておく。これに対して福垣北2・3号墳は、弥生時代の方形墳の築造方法をそのまま継承したもので、中心埋葬施設とともに周辺埋葬施設があることなどから、弥生時代の墓制をそのまま踏襲した在地色の強い“在地型古墳”と考えられる。

一方、沢3号墳は、前方後円墳という畿内的な墳形であるが、全長が46mと円墳である私市円山古墳よりも規模は小さい。外部施設である段築は不明瞭であり、葺石も拳大の河原石が大半であり、私市円山古墳にくらべ見劣りする古墳である。そして古墳の立地をみると、私市円山古墳が由良川を見下ろす良好な位置に立地するのに対し、沢3号墳は由良川の支流である犀川下流の沖積平野を見下ろす位置にある。

このように、立地・規模等をみるかぎり、沢3号墳は畿内型古墳とはいいがたく、ここ

では“準畿内型古墳”と仮称しておく。

5　畿内型古墳・準畿内型古墳そして在地型古墳

私市円山古墳を中心とした綾部盆地では、段築・葺石・埴輪を外部施設とし、豊富な副葬品をもった畿内型古墳、墳形は前方後円墳でありながらも規模が小さく、立地も狭い範囲を見下ろす位置にある準畿内型古墳、そして弥生時代の墓制をそのまま踏襲した在地型古墳がそれぞれ共存してある。

この3タイプの古墳の変遷を綾部盆地のなかでみていきたい。

私市円山古墳に先行する畿内型古墳としては、菖蒲塚古墳・聖塚古墳がある。[7] 両古墳は5世紀前半の古墳であり、菖蒲塚古墳が聖塚古墳に先行すると考えられている。この菖蒲塚古墳→聖塚古墳→私市円山古墳が、綾部盆地での畿内型古墳の変遷であり、私市円山古墳の築造された5世紀の中頃に近い時期をもって畿内型古墳は終息する。

準畿内型古墳は、各盆地、各河川流域で存在する。

菖蒲塚古墳・聖塚古墳が位置する八田川の下流域では、政次[8]1・2号墳が殿山1号墳に先行するかあるいは同時期のものと思われる。また、政次1・2号墳と同一盆地にある高槻茶臼山古墳[9]は、後円部から出土した須恵器(TK23～TK47型式)から政次1・2号墳に後続する古墳である。高槻茶臼山古墳と相前後した時期の古墳として野崎5号墳[10]がある。

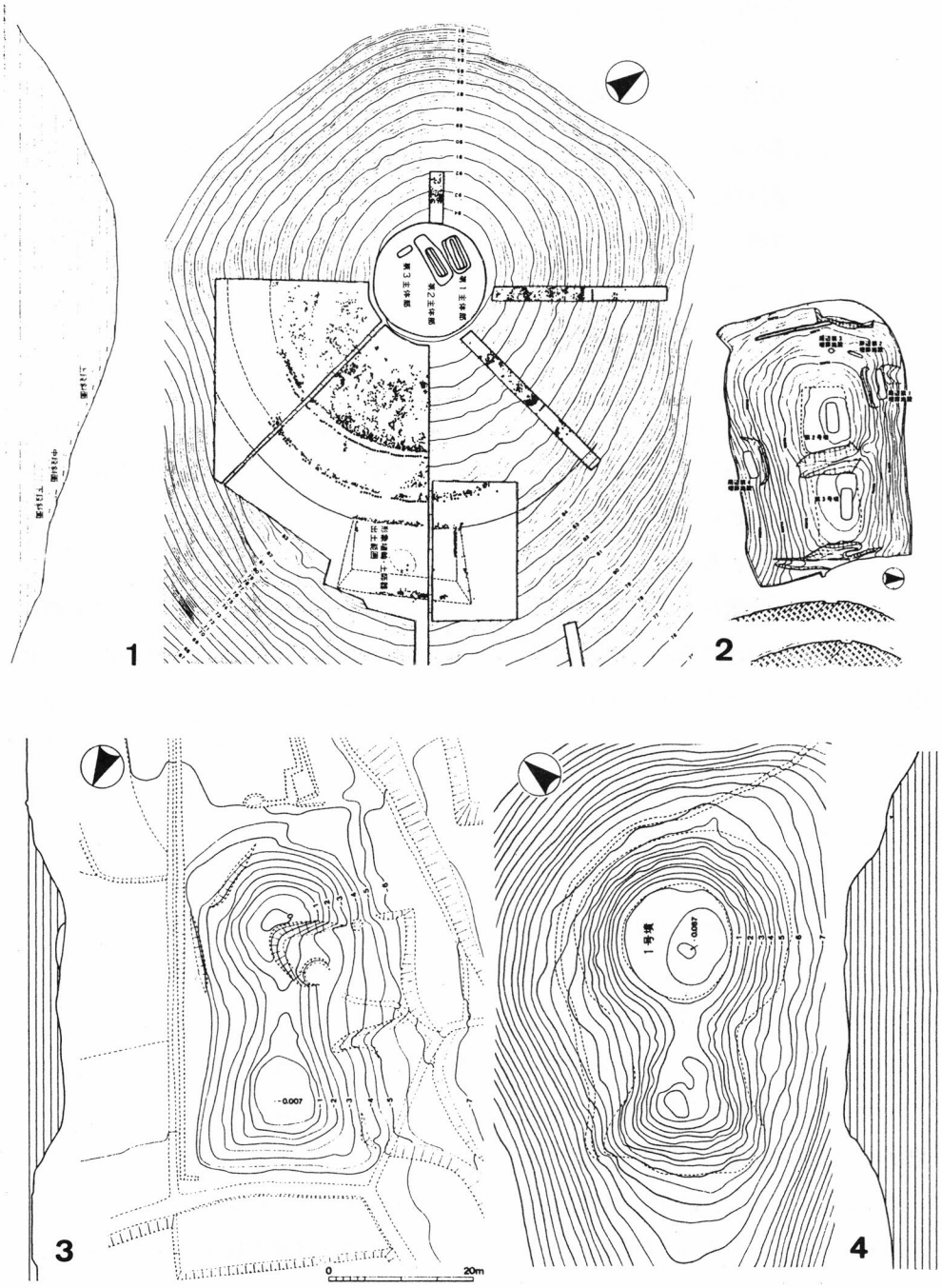
以久田野古墳群における準畿内型古墳としては、殿山1号墳→沢3号墳→以久田野78号墳などがあり、私市円山古墳築造以後も準畿内型古墳が築造され続けることは、前述したとおりである。

在地型古墳は、福垣北古墳群のほかは、現在、以久田野古墳群の大半がそれにあたると考えられる。[11] そして、福垣北古墳群に先行する古墳として、犀川を挟んで対岸にある成山古墳群が4世紀の前半に築かれている。

このように、綾部盆地における古墳の変遷をみていくと、4世紀に成山古墳に代表される在地型古墳が築造され続けるが、5世紀前半代に畿内型古墳が築かれる。この畿内型古墳は綾部盆地の東端、八田川上流域に築かれる。

綾部盆地において、畿内型古墳は段築・葺石・埴輪列・周溝(菖蒲塚・聖塚のみ)という外部施設をもちながらも、前方後円墳という墳形をとることは畿内政権から容認されていない。

一方、準畿内型古墳は、前方後円墳という墳形でありながら、外表施設としては豊富さに欠ける。立地をみると畿内型古墳が広範囲に盆地を見下ろす要衝の地にあるのに対し、準畿内型古墳は狭い範囲に築かれている。また畿内型古墳が独立墳として在地型古墳を寄



第３図　私市円山古墳ほか墳丘図(１／1,000)

１．私市円山古墳　　２．福垣北２・３号墳　　３．沢３号墳　　４．殿山１号墳

せつけない感を呈するのに対し、準畿内型古墳は在地型古墳と共存している場合が多い。

中丹波地域における畿内型古墳の被葬者については、本来準畿内型古墳として埋葬されるべき被葬者が「輪番制」により在地から離れた要衝の位置に、畿内政権から承認されて畿内型古墳を築造したものか、あるいは畿内政権から派遣された被葬者がこの地域を掌握したのち、要衝の地に畿内型古墳を築造したものかどうかは明らかでない。ただ私市円山古墳では埋葬施設の上面から共同体祭祀の跡と思われる土器祭祀の跡を思わせる土器の出土例がないことから、在地の共同体と切り離した形で古墳が築かれたものと思われる。一方、準畿内型古墳は、以久田野古墳群に代表されるように在地型古墳と共存しており、在地型古墳の被葬者を統括しつつも、共同体から離れえないかのような形で古墳が築かれいる。これは準畿内型古墳の立地とともに政次1号墳で土師器高杯が、高槻茶臼山古墳は須恵器杯・甕が出土しており準畿内型古墳では共同体祭祀に伴った土器の出土があることからもうかがい知ることができる。

6　私市円山古墳の意味

在地型古墳が弥生時代以降の墓制を変化しつつも基本的にはそれを踏襲しているのに対し、準畿内型古墳は在地型古墳の被葬者とは若干かけ離れつつも在地集団にしばられた形で築かれた古墳と思われる。

これに対して、畿内型古墳は準畿内型古墳の被葬者をも含め、盆地全体を掌握した被葬者か、あるいは畿内政権の中丹波地域での地方進出のくさびとして築かれた古墳と思われる。畿内政権の地方支配という観点に立てば、在地有力集団に畿内型古墳をまねた前方後円墳という墳形を容認しつつも、小規模かつ在地の共同体とかけ離れることのない位置に準畿内型古墳が築かれているのに対し、中丹波地域における畿内型古墳が本来畿内型古墳の典型である前方後円墳という墳形を採用することなく、方墳あるいは円形であることは、畿内政権における中丹波地域の政治的役割を如実にあらわしている。とともに、畿内政権における地方支配が準畿内型古墳に代表される有力首長を温存しつつも、準畿内型古墳の被葬者を支配する形で畿内型古墳に代表される畿内政権のテコ入れによるさらに有力な首長を作りだすことによって、地方支配を行うという二重支配があったものと思われる。

（いしい・せいじ＝当センター）

1　石井清司「福垣北古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第31冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988年
田代弘「福垣北古墳群」（『京都府遺跡調査概報』第36冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究

センター）　1989年

2　田辺昭三『須恵器大系』平凡社　1981年

3　川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-２）　1977年

4　常磐井智行「由良川中流域の古墳の動向」(『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会）　1983年
奥村清一郎「丹波」(『歴史公論88.古代の日本海文化』）　1983年

5　鍋田勇・石崎善久ほか「私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1989年

6　５に同じ

7　中村孝行『聖塚・菖蒲塚古墳試掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第11集　綾部市教育委員会）　1984年
平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第１集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987年

8　長谷川達「政次１号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第８集）　1981年

9　奥村清一郎「綾部市高槻茶臼山古墳測量調査略報」(『京都考古』16）　1975年
奥村清一郎「茶臼山古墳」(『丹波の古墳Ⅰ』山城考古学研究会）　1983年

10　小山雅人「野崎遺跡の削平された古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第24号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987年

11　在地型古墳の例としては、福垣北古墳群・政次古墳群のほか、福知山市豊富谷丘陵遺跡(和久川流域)大宮町ゲンギョウの山古墳群(竹野川流域)などがあり、特に丹波地域での調査例が多い。その特徴は、次のとおりである。
(１)数基から10数基の古墳が丘陵尾根線に連綿と築造されている。
(２)古墳は15m未満の方(あるいは円)墳で、一墳多葬のものが多く、一墳一葬のものは少ない。
(３)埋葬施設からの副葬品は皆無のものが多いが、あったとしても小量の鉄器(鉄剣・鉄鏃・刀子・鉄斧など)と玉類である。
(４)土器の出土量は少ないが、出土した古墳の例をみると、土器を棺あるいは墓壙上面に置いている場合が多い。
(５)埴輪の出土例は非常に少なく、埴輪を出土したとしても埴輪列として樹立したような出土状態ではなく、数個体分を破砕したかのような状態で出土している。
(６)これらの特徴はいずれも弥生時代の墓制と大差ない。